

【佳作】「FLAGS CHAIR」（大塚 悠太さん）

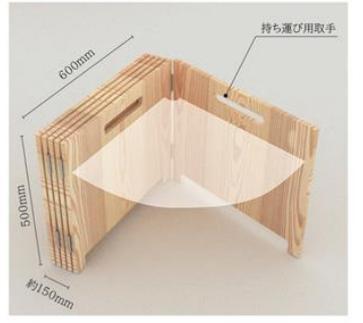
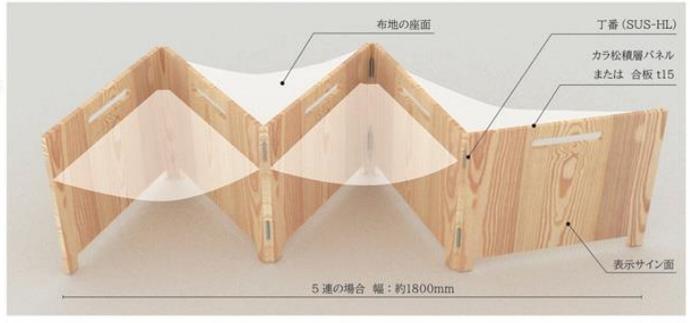


路地に点々と置かれたFLAGSCHAIR。パネル面はお店のサイン(FLAG)として活用できます。

西陣の路地は、「ぼったり床几」(図1)など路地の細さならではの家具の工夫で彩られている。その伝統的な要素を発展した。場や状況に合わせて動かし・たたくことのできる屋外ファニチャーを提案します。御朱印帳(図2)のように、複数枚の折り置まれたパネルは、使わないときは軒先にたたんで保管されます。パネルを開くことで旗(FLAGS)を掲げるにして椅子の座面が現れます。使われる人数・スペースに応じて、設置する位置や幅を変えられるベンチです。西陣の織物産業を象徴する布による座面が路地の新しい風景とコミュニティを生むことを期待します。



図1:可動するぼったり床几 図2:折り置まれた御朱印帳



5枚程度の木のパネルがそれぞれ丁番で連結され、広げること布地が帆を貼り手前と奥に4人分の座面となります。パネル面は表示サインとなります。パネルを折りたたむことで約150mm程度まで薄く持ち運ぶことができます。

【佳作】「街の音を紡ぎ出す 路地のサウンドスケープ」(大場 卓さん)

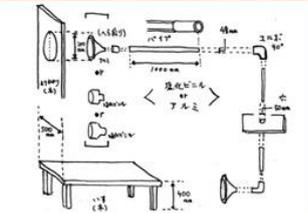
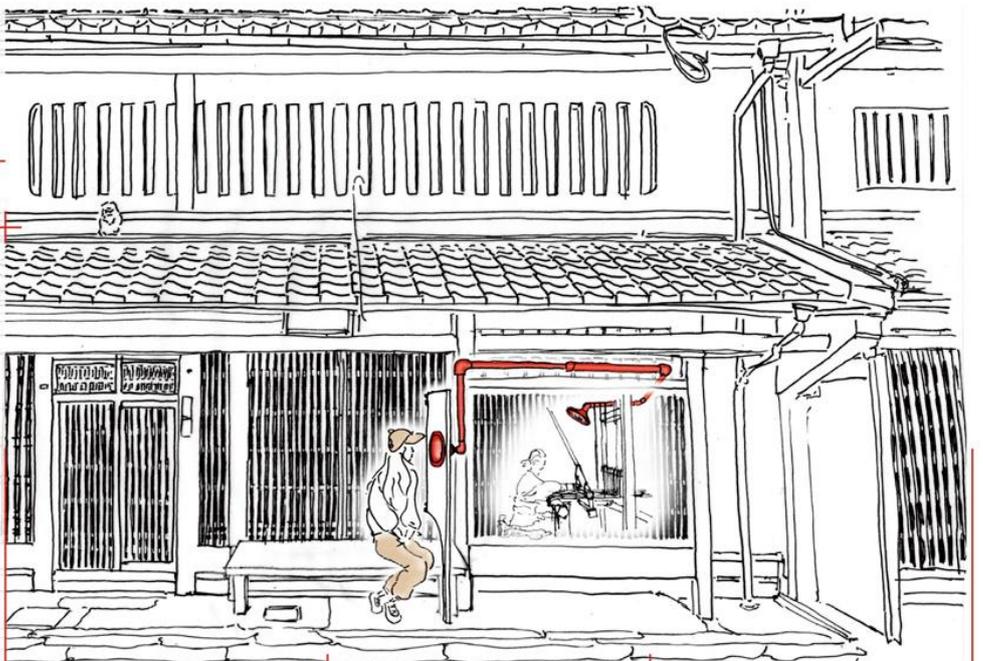


街の音を紡ぎ出す
路地のサウンドスケープ

路地の魅力は「ゆかしさ」にある。先に行きたくなる心、ぼんやりと見える行り、懐かに匂う料理の匂い、道の先から聞こえてくる耳をくすぐるような音...、全体像はわからない、けれど設定された刺激が全体を想像させてくれる。もっと聞きたい、見たい、感じたい、そんな心を引き出してくれるのが、路地であり、路地の魅力である。

西陣では古くから織物産業が栄え、街の中に機械の音があふれていた。現在もまだその産業、その音が残っている。さらに近年新たな産業、プロダクトを生み出す得意手の思いも集まってきた。そんなプロダクトにももつくりの音がある。それぞれが持つ独自の音。そんな街中のサウンドスケープに恵まれ、産業に支えられた路地だからこそ、もつくりの音を取り出し、人々の「ゆかしさ」をくすぐるストリートファニチャーを提案する。

具体的には中空の管で音を伝える伝音管の技術を用いて、家の奥に音源製作場と連携をつなぐ。道からでも管の音に耳を傾ければ、まるで現場にいるかのようにもつくりの音を聞くことができる。また、懐かき音でしかなかったものを形に現すことで、これまでは音に引き出されなかった、または奥に踏み入れてこなかった人が、地域の産業興味関心をもって聞ける機会となる。もちろん職人・デザイナーからすれば、新たな顧客との出会い、あるいは次なる産業の創り手との出会いになるかもしれない。



【佳作】「通い箱とクッション」(小林 賢一さん)



通い箱とクッション

締め切りの4日前の朝にコンペの存在を知って出そう！と思っただけで椅子なんて作ったことない。午後からは仕事があるからそんなに悩む時間もない。自分の家の軒先に出てウンと頭を抱えているとチリーンという音が響いて綺麗なおねいさんが手押し車で豆腐を売りに来た。自分の家の前に歩き売りの豆腐屋が回っているなんて全然知らず、綺麗なおねいさんと話したいが為に無駄話に花を咲かせて豆腐ドーナツとおかずケーキを買う。話疲れて腰掛けたのが、買ったものの、使い方に悩んで玄関に出っ放しになっていた清酒の通い箱だった。座り心地が悪かったので二階のアトリエに置きっぱなしになっていたクッションマットの切れ端を上に被せる。もうこれで良いんじゃないだろうかと思った。その日はとても良い天気で軒先で、さっき買った豆腐ドーナツを食べていたら見ず知らずのおばあちゃんが話しかけてくれた。ネットによって繋がりが損なわれているからコミュニケーションを取って行こう！とよく聞くけれど本当はそんなに多くのものは必要じゃないんじゃないだろうか。少なくともその日の僕は清酒の通い箱とクッションの切れ端で二人の人と仲良くなることができた。

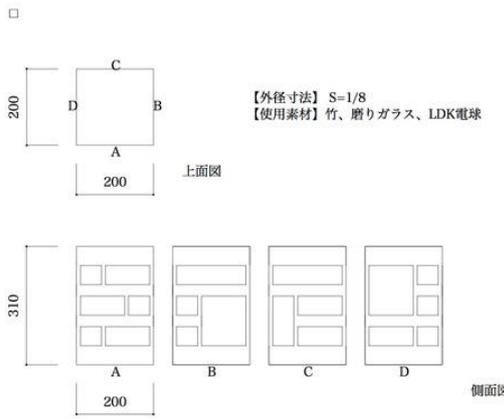


【佳作】「黄昏時—光と陰の行灯—」(近藤 優衣さん)

黄昏時—光と陰の行灯—

黄昏時とは一日のうちの日没直後、雲のない西の空に夕焼けの名残の赤さが残る時間に、景色が黄金色に輝く時間帯のことを指します。黄昏を古くは、「たそがれ」と言い、江戸時代以降「たそがれ」となりました。薄暗くなった夕方は人の顔が見分けにくく、「誰だあれは」という意味で「誰そ彼(たそがれ)」と言ったことからこの言葉が始まりました。

光がまだ地上に残っている時間帯には、地面に格子状の影が落ち床に描かれます。風情のあるオブジェになり、建物や立ち並ぶ道にアクセントが一つ加わります。変わって夜になると、今度は行灯の中からの光で、床に格子状の光が落ち床を照らします。暖かくぼんやりと落ちた光が反射し、足元から優しい光で人や道を照らします。雨が降った時には濡れた石に反射し、また違う景色や光、影が囁めるとも思います。ただ足元を照らすだけではなく、道を彩り作り、暖かく優しく包み込むような光で照らし、そして、時間や天候、季節によって様々な見方や感じ方を提供し、人々の感受性をより豊かにする、そんな行灯になることでしよう。



イメージ画像



近藤 優衣

【佳作】「一体化」（清水 里佳さん）

Concept

『一体化』

路地とは、昔ながらの住宅が立ち並びその家と家との間の光の差し込まない薄暗く狭い道がイメージされる。しかし路地には独特の魅力があると思う昔の路地は一つの空間を共有する者同士のコミュニティが存在して生活に使う通路という機能だけでなく人々が交流する場となっていた。そんな昔の背景から路地の魅力が生まれているのではないと思う

路地は狭いが車などが侵入しない安全な場所であり人と人とが親しみやすい距離感になっている

路地との一体化

- 歴史のある路地に馴染むデザイン -
路地に多く見られる木製の格子
プライベートな空間とパブリックな空間を
雰囲気を壊す事なく分ける事が出来る。
この格子を用いる事で長い年月を掛け築いてきた
路地という歴史ある空間と一体化し
路地に馴染むことができる

普段は格子としての役割を担っているが
井戸端会議する時などは
折重なっている部分を倒すだけで
椅子となり交流の手助けとなる存在に



【佳作】「かんざし」（照沼 基さん）

かんざし

路地には独特の世界観があり、多くの人を魅了しています。この『かんざし』は、そんな人々を路地の世界に誘う灯籠であり、尚且つ路地の中を案内する手燭でもあります。この『かんざし』は路地の中に複数配置し、路地の中で共有する照明器具です。路地に住む住人や路地に観光に来た人々は、かんざしの様に手燭を引き抜き路地の中で持ち歩くことができます。

主な素材は、赤と黒の漆塗りで仕上げられたヒバ材です。これは、西陣の伝統産業である西陣織や伝統芸能、花街、などのイメージからゆったりと落ち着いた和ではなく、華やかな和を想像した為、鮮やかで光沢のある漆塗りの素材を使用しました。

デザインは、甚帯や舞妓などが身に付けている簪をモチーフにしています。また、古くから縁起が良いとされている八角形もデザインに取り入れています。そして、手燭が無い状態でも照明として機能するように、柱の内部にもライトを仕込み穴から光が漏れるようになっています。その穴は八方向に複数空いている為、様々な角度から手燭を押し込むことができるので、その時々で形が変化するのが特徴です。

引き抜くことで、手燭として使う事が可能

他の穴にも挿すことができる為、様々な形に変化する

空いている穴からは、光が漏れる

：ヒバ材 漆塗り仕上げ（黒）

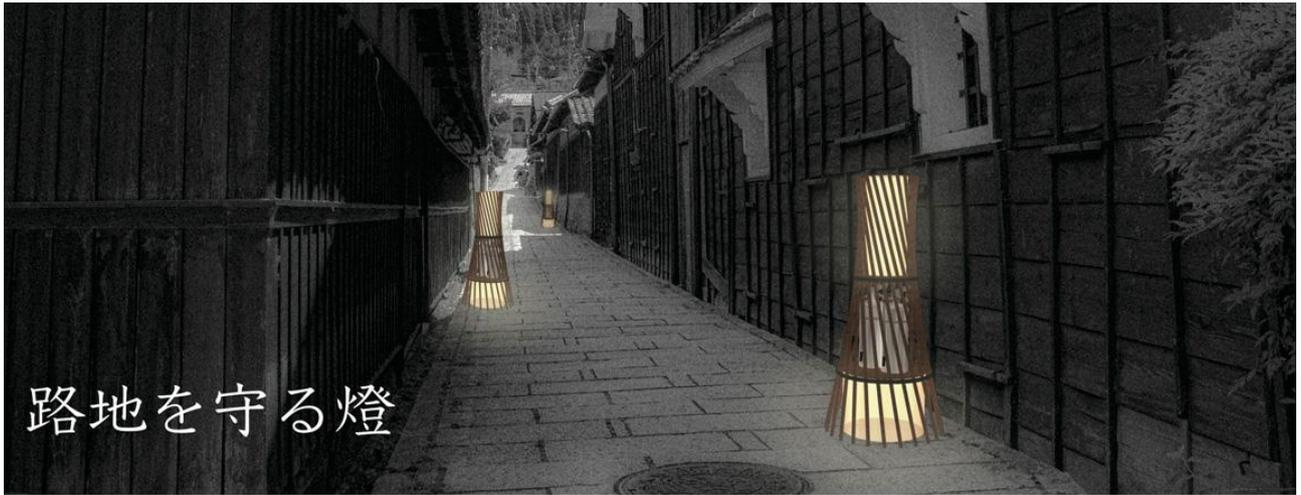
：ヒバ材 漆塗り仕上げ（赤）

1400

150



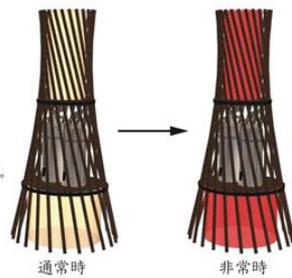
【佳作】「路地を守る燈」（福岡 大輝さん）



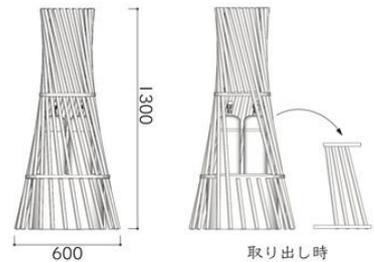
路地を守る燈

CONCEPT

日本はさまざまな災害が襲う災害大国であります。
 木造家屋の密集し路地の入り組む京都西陣で、一番の脅威となるのは災害に伴う
火災であると考え、この場所を守る家具を今回デザインしました。
 この家具には二つの機能がおり、一つは路地を燈す**照明**としての機能です。
 通常時は路地の暗い夜道を暖かく燈し、また路地のオブジェとして
 路地に住む人々が世間話などのコミュニティを行えるスポットとしても機能します。
 また非常時には安全な場所へ人々を導く**誘導灯**として機能します。
 また蓄電池を搭載することにより停電の際にも燈を絶やしません。
 もう一つは**消火器**を収納する機能です。西陣の景観を損なうことなく
 消火器を設置する為、デザインに木の格子を大きく取り入れることよって
 西陣の路地の和の雰囲気に調和させました。
 また屋外への設置を想定している為、材質には雨に強いヒバを用いました。
 火災の際には初期消火がとても重要だと言われてます。
 迅速に消火活動を開始できるように、格子を簡単に取り外せる機構を設けました。



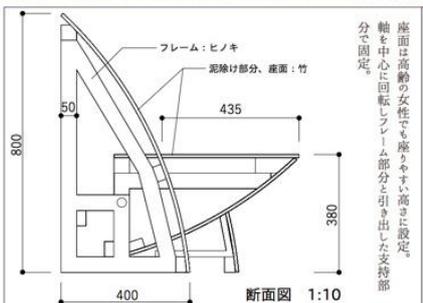
通常時は路地を燈す照明であるが
 非常時には広い通りへ導く誘導灯となる



【佳作】「ひとよらい」（南出 真吾さん）



住まい手が変わり観光客が増える西陣の**古くて新しい風景**を作る。
 犬を追い払い家屋を汚れるため京町家に置かれた**犬矢来**もはや本来の犬矢来としての機能はとんだ持たない、街なじみ深い京都の景観形成に大きく寄与しても、京都の**路地**は間口の狭く住居の生活感が弾み出し、コミュニティ形成の機会を多く持っている、そんな二つのポジションを活かして、人が寄り合って話したくなるような**能動的な機能**を持った犬矢来を作る。西陣に住む人にとって路地は**共通の居間**であり、共通の庭である。そこに人が置かれたいと**共通の居間**がある。路地にも人々の居間がある。住まいの一部である路地にも家具は主張をせず、人ががはつと一息つける場所を提供する物かなものだろう。
 一見するとただの犬矢来で日常の風景であるが、ある時はベンチとなつて近所の人や店を出た観光客が座っている新たな日常を作り出す。
 これは西陣の**ひとよらい**（一人寄せ）である。



ひとよらい（一人寄せ）
 建物を守るための**能動的**であった犬矢来をベンチとして作り変えることにより、人を集めて交流を生む**能動的な家具**にする。

いぬやらい（犬矢来）
 かつては犬を追い払うために置かれていた犬矢来は、現在の機能は見られないが、京都の重要な**景観材料**の一つである。

ろじ（路地）
 西陣の路地は京都の中でも特に狭く植木鉢や自転車を**生活が路地に溢れている**。間口が狭い京町家に住む住人にとって路地は**共有の庭**のような存在である。

【佳作】「漏れる光」（八木田 楓雅さん）

漏れる光

大きな通りから逸れた狭い道、これが路地である。大通りの騒がしく落ち着きのない空気とは変わり、路地に入るとその狭さが私達に安心感を感じさせ、落ち着きがあり人情味あふれる時間が流れている。路地を通過することで私たちの心を落ち着かせ豊かにし有意義な時間を過ごすことができる。狭さこそが「路地」の魅力であると考えます。

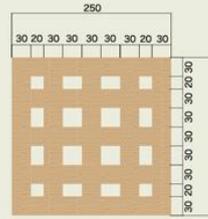
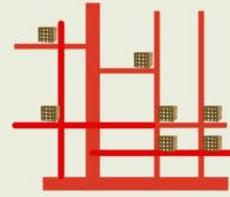
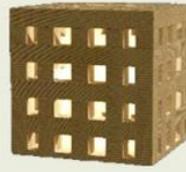
「路地」というように一括りにしてきたが一つ一つ表情が異なっている。路地の細さによって先の見え方が違う。分岐する道、二、三段の階段。先に何があるのか、行ってみたいという好奇心が湧いてくる。陽の差し方も面白い。陽の当たる所、建物の影になる所、植物の間から差す木漏れ日。光の陰影を変化させる。地面にひかかれている素材でもコンクリート、大小異なる石や石畳。それぞれ違いがあり楽しめる。

私は今回、「光」に注目した。昼の「路地」は太陽の陽が差し込み、建物や植物の間から漏れてくる。夜はどうだろうか。そう思い照明器具を作ることになった。

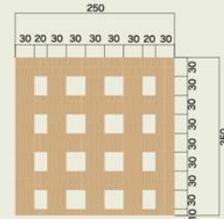
設計のモチーフにしたものは、格子である。西陣の「路地」に馴染むように和を連想させた。格子の間から漏れる光。これが昼と夜の繋がりを果たせる。

この照明の設置場所は「路地」の角にしようと考えている。理由としては、目印となるように、そしてその角の先に何があるのかといった好奇心を抱いてもらうという思いからである。

照明の素材としては、今回は素材のシンプルさや暖かさを出すために竹を使用することにした。



上面図



側面図

